

地域のがんサロン参加を通じて がん体験者が社会的役割を獲得する過程

栗栖 千尋^{*1} 岡田 麻里^{*2}

*1 県立広島病院

*2 県立広島大学保健福祉学部看護学科

2017年 9月 1日受付

2017年 12月 14日受理

抄 録

本研究の目的は、地域のがんサロン参加を通じて、がん体験者が新たな社会的役割を獲得する過程を明らかにすることとした。研究協力者はA県B支部の在宅ホスピスボランティアが運営しているサロン参加者のうち、がん体験者であり、5年以上継続してサロンに参加している3名とし、1時間程度の半構造的面接を実施した。

質的分析の結果、社会的役割を獲得する過程は、『苦悩から生じる出会いへの希求』『癒され体験による母親役割の再生』『がん体験をいかした地域づくり』の3つのコアカテゴリが浮上した。これらは、9個のカテゴリと35個のサブカテゴリで構成された。

役割獲得に至るためには、受容・承認してもらえる他のがん体験者の存在が必要不可欠であることと、子育て期の人は親子ともにがんの影響を受け、サロンはがんをもつ一人の人として過ごすことができる場として機能し、『がん体験をいかした地域づくり』に広がっていることがわかった。

キーワード：がん体験者、がんサロン、社会的役割、役割獲得

1 緒言

日本における死因の第一位は悪性新生物である¹⁾が、年齢調整死亡率は1990年代後半から減少傾向であり、5年生存率は多くの部位で上昇傾向である²⁾。それゆえ、医学の進歩によって、がんとともに生きる時代へ変わりつつある。また、医療費抑制のため平均在院日数は短縮化している^{3,4)}。そのため、がんの治療を続けながら地域で生活する人が増加していると言える。

近年、厚生労働省によるがん対策推進基本計画では、がんと診断された時から、診断、治療、在宅医療など様々な場面で、緩和ケアが切れ目なく提供されることを重点課題として挙げ、精神心理的、社会的苦痛を含めた全人的な対応の必要性⁵⁾を述べている。しかし、廣津らが、在宅で過ごすがん患者の中には、以前の役割を果たせないといった社会的な苦痛が生じている⁶⁾と指摘しているように、がんと診断され地域で生活する人は、家庭や職場等の社会における役割喪失の危機が生じ、社会的苦痛を抱えていると言える。そのため、地域で生活するがん体験者へ向けた支援が求められており、支援方法の一つとしてがんサロンが挙げられる。光行らは、がんサロン参加者を対象とした半構造的面接の結果から、参加者が役割意識を高揚させ、具体的な役割意識を持つに至った⁷⁾ことを明らかにした。また、浅野らは、手術後2年から3年経過したがん患者を対象とした面接結果から、自分らしさを回復するためには、家庭や社会での自らの役割を自覚し、自分を役立てるといった自分が生きることの意味を見出すことが必要である⁸⁾と指摘した。したがって、がんサロン参加を通じて、身近な社会における役割を自覚し果たしていくことは、がんをもちながら自分らしく生きることにつながると言える。

また、豊田らは、病院のがんサロンと比較して地域のがんサロンは、参加者主体であるという点とがんを経験したことを活かして他者へ貢献しようと成長していく点が特徴である⁹⁾と述べていることから、地域のがんサロン参加者は、主体的な活動を通して、新たな役割を見出していると言える。しかし、地域のがんサロンは数が少なく、地域のがんサロンの参加によって社会的役割を獲得する過程を当事者の視点から明らかにした研究はみられない。

以上のことから本研究では、当事者が主体的に活動している地域のがんサロンに焦点をあて、参加を通じて、がん体験者が社会的役割を獲得する過程を明らかにすることとした。

2 目的

本研究の目的は、地域のがんサロン参加を通じて、がん体験者が新たな社会的役割を獲得する過程を明ら

かにする。これにより、がん体験者の社会的側面に対する看護介入を検討するための一助とする。

3 方法

3.1 研究協力者

A県B支部の在宅ホスピスボランティアが運営しているがんサロン（以下、サロンと略す）を本研究対象として選定した。当サロンを選定した理由は、継続的・定期的な当事者主体の活動が行われている点である。まず、サロン代表者に研究の趣旨を文書および口頭で説明し、同意書にサインを得た。その後、サロン参加者に面接調査の協力を呼びかけた。研究協力に対する研究のサロン参加者のうち、がん経験者であること、5年以上継続してサロンに参加していることを選定条件とし、本研究の趣旨を理解し同意の得られた3名を研究協力者とした。彼らは、現時点でがんに関する症状はなく、治療終了していた。

3.2 データ収集方法

研究参加に同意の得られた3名の研究協力者に半構造的面接を1時間程度行った。面接はインタビューガイドを用いて実施し、がんと診断されてからサロン参加に至るまでと、参加してから現在に至るまでの思いを自由に語る形式とした。面接前に、質問紙を配布し、性別、年齢、がんと診断された時期、参加継続年数など、研究協力者の基本情報を得た。データ分析中、詳細な内容を得るため2名の研究協力者に対して追加の面接を30分程度行った。これらすべてを質的データとした。

著者は、研究協力者と関係を構築するため、面接実施の約5か月前から月に数回定期的にサロンに参加した。面接を実施する前に、研究協力者3名に研究協力を依頼し面接方法を説明した。面接は、サロンの開催場所または著者の所属大学の一室で、研究協力者の都合を考慮した日時に行った。面接内容は許可を得て録音し、逐語録を作成した。

3.3 分析方法

社会的役割に関する解釈された記述をコーディングし、類似する意味内容を比較検討しながらカテゴリ化を行った。本研究協力者は、40代の子育て中の女性、60代夫婦2人暮らしの男性、70代一人暮らし女性であった。そのため、性別およびライフステージにおける共通点や相違点を比較しながら分析した。そのため、ライフステージ、性別について、共通点や相違点を比較しながら分析した。

3.4 倫理的配慮

県立広島大学研究倫理委員会へ研究計画書を提出し承認を受けた（承認番号：16MH033）。研究協力者

に研究の目的、内容、方法を文章と口頭で説明し、研究への理解と同意を得た。また、研究への参加は自由であり、研究に協力できない場合でも不利益は生じないこと、研究への参加を承知した場合でも途中で中止を申し出ることができること、面接で得られた情報は本研究以外では使用しないこと、個人が特定できる表現を避け記号化することを文章及び口頭で説明した。面接は、研究協力者の都合を考慮した日時や場所で行った。結果を公表する際、個人が特定できる名称は記号化した。

4 結果

4.1 研究協力者の概要

研究協力者の概要を表1に示す。協力者は3名、性別は男性1名、女性2名で、平均年齢(SD)は62.3(13.6)歳であった。診断からの平均年数(SD)は

8.3(3.5)年、サロン参加平均継続年数(SD)は7.7(3.5)年であった。サロンを知ったきっかけは、がんに関する情報を掲載している冊子、新聞広告、サロンを紹介するテレビ番組であった。また、3名の共通点は、3名とも“同じがんの体験をした人の話を聞きたいという思いをもって”、情報を得たことによって“自分からサロンに参加した”点であった。

表1 研究協力者の基本情報

性別(名)	男性 1 女性 2
平均年齢(SD)(歳)	62.3(13.6)
診断からの平均年数(SD)(年)	8.3(3.5)
サロン参加平均継続年数(SD)(年)	7.7(3.5)
サロンを知るきっかけ	がんに関する冊子 新聞広告、テレビ

表2 がんサロン参加を通じてがん体験者が社会的役割を獲得する過程

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
苦悩から生じる出会いへの希求	がんがもたらす親子の苦悩	心と身体の回復一杯一杯の状態
		子どもへの配慮が行き届かない状況
		子どもの心が母親から離れていく表情や行動
	がんがもたらす苦悩	差し迫る死の意識
		つきまとう再発・転移への恐怖や不安
		治療の副作用・後遺症による身体の不調 一変する日常生活
	がん体験者と出会うことへの希求	経験者同士でなければ分かり合えないという孤独感
		がん体験者と語り合い、揺れ動く心を安定させたい思い
		実体験に基づくがんの情報を求める 立ち直り前を向くために経験者の存在が必要と実感する
癒され体験による母親役割の再生	がんをもつ一人の人として癒される体験	ありのままの自分であることができる
		気持ちが穏やかになり明るい方へ向く
	子どものための癒しの場作り	他の参加者からケアされる子どもを見守る
		サロンの雰囲気になじむ子どもを見守る 明るく元気になっていく子どもを見守る
	母親役割意識の変化	自分と子どもの状況から気付きを得る
		子どもに自分の病気のことを語る
		辛かった時の子どもの思いが肯定されるよう、状況を繰り返し説明する
		子どもとの思い出を作る
		がんになっても生きていけると安堵する
がん体験をいかに地域づくり	安心感から得られる生きることへの希望	経験者同士で分かち合う
		ありのままの自分であることができる
		支え合える関係性を感じることができる
		悩みや不安からひと時間離れることができる
		気持ちが穏やかになり明るい方へ向く
	役割意識の高揚	サロンへ恩返しをしたいという思い
		人のために尽くす姿に心を打たれる
		がんがもたらす肯定の面を見出す
		人のために行動しようとする思い
	サロンにおける役割の認識	自分に出発することから始める
		サロンの場作り
		がんをもつ人へのケア
		組織的な活動
		地域への発言

4.2 結果の概要

分析の結果、がん体験者が社会的役割を獲得する9個のカテゴリと33個のサブカテゴリが抽出された。これらを表2に、カテゴリを【 】, サブカテゴリを< >として示した。これらのカテゴリは、子育て期の研究協力者と、子育て期が終了し子どもが成人し独立している壮年期・老年期の研究協力者にある研究協力者のライフステージの違いによって、3つのコアカテ

ゴリが浮上した。

すなわち、サロン参加を通じてがん体験者が社会的役割を獲得する過程は、子育て期と子育て終了期に共通するものとして『苦悩から生じる出会いへの希求』、子育て期の研究協力者は、『癒され体験による母親役割の再生』(図1)、壮年期・老年期の研究協力者では、『がん体験をいかした地域づくり』(図2)であった。

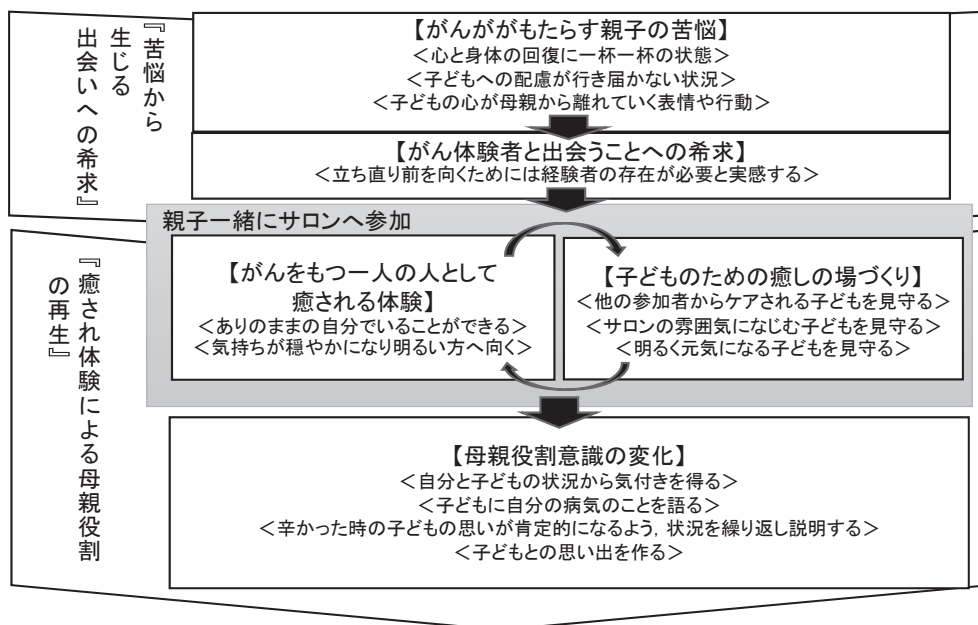


図1 『癒され体験による母親役割の再生』

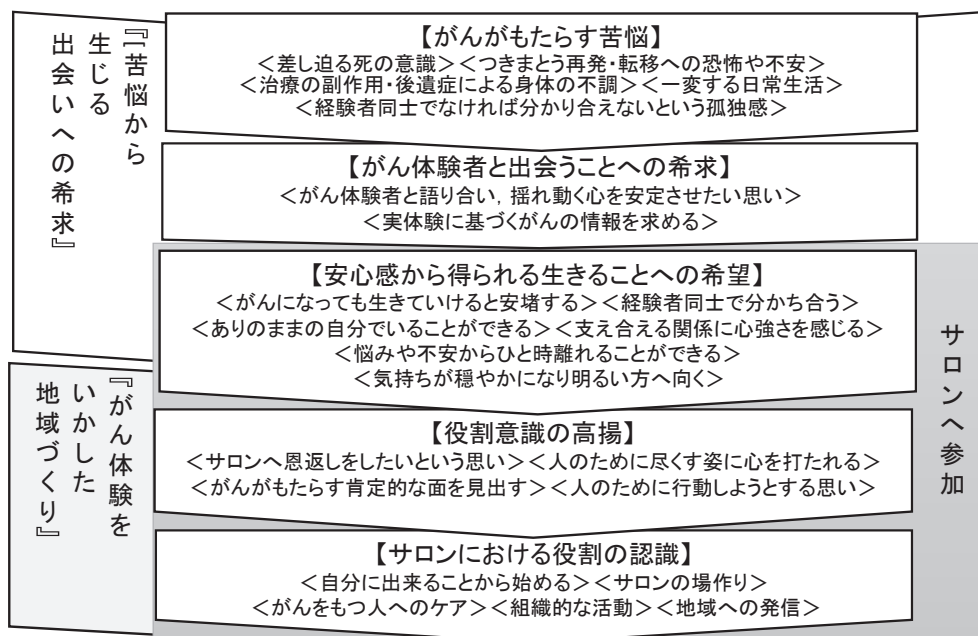


図2 『がん体験をいかした地域づくり』

4.3 がんサロン参加を通じてがん体験者が社会的役割を獲得する過程

4.3.1 苦悩から生じる出会いへの希求

【がんがもたらす親子の苦悩】とは、がんは研究協力者だけでなく、家族へも影響を及ぼしていた。特に、子育て中の研究協力者から母親としての自分自身だけでなく、子どもにとってもつらい体験であったことが語られた。このカテゴリは、＜心と身体の回復に一杯一杯の状態＞＜子どもへの配慮が行き届かない状況＞＜子どもの心が母親から離れていく表情や行動＞の3つのサブカテゴリから構成された。

【がんがもたらす苦悩】とは、がんという病を経験することによる身体的・精神的な苦しみを意味する。このカテゴリは、＜差し迫る死の意識＞＜つきまとう再発・転移への恐怖や不安＞＜治療の副作用・後遺症による身体の不調＞＜一変する日常生活＞＜経験者同士でなければ分かり合えないという孤独感＞の5つのサブカテゴリから構成された。

【がん体験者と出会うことへの希求】とは、自分以外のがん体験者と出会い、話をしたり、思いを聞いてもらいたいと強く感じることである。この思いが、サロンへの参加につながっていた。このカテゴリは、＜がん体験者と語り合い、揺れ動く心を安定させたい思い＞＜実体験に基づく情報を求める＞＜立ち直り前を向くために経験者の存在が必要と実感する＞の3つのサブカテゴリから構成された。

4.3.2 癒され体験による母親役割の再生

【がんをもつ一人の人として癒される体験】とは、母親である前に一人の人間であることを実感できる体験である。このカテゴリは、＜ありのままの自分であることができる＞＜気持ちが穏やかになり明るい方へ向く＞という2つのカテゴリから構成された。

【子どものための癒しの場づくり】とは、子どもはがん患者である母親の大きな影響を受けた第二の患者と表現され、一緒にサロンに参加することによって、子どもも癒される体験をするために、母親として癒しの場を子どもに与えることである。このカテゴリは、＜他の参加者からケアされる子どもを見守る＞＜サロンの雰囲気や馴染む子どもを見守る＞＜明るく元気になる子どもを見守る＞という3つのサブカテゴリから構成された。研究協力者は、子どもにとって祖父母のような年代の参加者からの声かけや、サロンで一緒に料理や食事をする体験が、子どもを明るく元気に行っていることを認識していた。

【母親役割意識の変化】とは、がんを体験した母親として、これまでとは違う新たな母親役割を獲得することである。このカテゴリは、＜自分と子どもの状況から気付きを得る＞＜子どもに病気のことを語る＞＜当時に対する子どもの思いが肯定的になるよう状況を

繰り返し説明する＞＜子どもとの思い出を作る＞という4つのサブカテゴリから構成された。

これらのカテゴリおよびサブカテゴリの関連性を図1に示した。

子育て期にある人が、がんと診断された場合、【がんがもたらす親子の苦悩】によって＜心と身体の回復に一杯一杯の状態＞となり、家庭内における妻と母という主要な役割を担いながら、生活を送ることの難しさを実感した。そして、＜子どもへの配慮が行き届かない状況＞が生まれ、＜子どもの心が母親から離れていく表情や行動の変化＞が生じていることを感じていた。このような状況の中＜立ち直り前を向くためには経験者の存在が必要と実感する＞という【がん体験者と出会うことへの希求】から、親子ともにサロンへ参加した。それによって、母親は＜ありのままの自分であることができる＞場を得て、＜気持ちが穏やかになり明るい方へ向く＞という【がんをもつ一人の人として癒される体験】をした。子どもと一緒にサロンに参加することは、【子どものための癒しの場づくり】となり、＜他の参加者からケアされる子どもを見守る＞など、＜明るく元気になる子どもを見守る＞っていた。このように、親子一緒にサロンに参加することで良い相互作用が生じ、それによって自分と子どもの関係を客観的にとらえ＜自分と子どもの状況から気付きを得る＞。さらに、＜子どもに病気のことを語る＞＜辛かった時の子どもの思いが肯定的になるよう、状況を繰り返し説明する＞＜子どもとの思い出を作る＞という【母親役割意識の変化】に至った。すなわち、がんを体験した子育て中の母親にとっての社会的役割の獲得とは、『癒され体験による母親役割の再生』であった。

4.3.3 がん体験をいかした地域づくり

【安心感から得られる生きることへの希望】とは、サロンに参加することで、不安や悩みから解放され安心感を得られることである。このカテゴリは、＜がんになっても生きていけると安堵する＞＜経験者同士で分かち合う＞＜ありのままの自分であることができる＞＜支えあえる関係に心強さを感じる＞＜悩みや不安からひと時離れることができる＞＜気持ちが穏やかになり明るい方向へ向く＞という6つのサブカテゴリから構成された。

【役割意識の高揚】とは、サロンに参加したことで他者への感謝の気持ちや前向きな気持ちが沸き起こることである。自らのがんの体験を生かして“他の人のために何かしたい”という思いを抱いていた。このカテゴリは、＜サロンへの恩返しをしたいという思いが込み上げる＞＜人のために尽くす姿に心を打たれる＞＜がんがもたらす肯定的な面を見出す＞＜人のために行動しようという思いが強まる＞という4つのサブカテゴリから構成された。

【サロンにおける役割意識の認識】とは、主体的にサロンに参加するようになることで、自らの役割を見つけ、地域活動として行動を起こすことである。このカテゴリは、〈自分にできることから始める〉〈サロンの場作り〉〈がんをもつ人へのケア〉〈組織的な活動〉〈地域への発信〉という、5つのサブカテゴリから構成された。

これらのカテゴリおよびサブカテゴリの関連性を図2に示した。

がんと診断されたことによって【がんがもたらす苦悩】を経ている。診断直後から〈差し迫る死の意識〉を感じ、その後も〈つきまとう再発・転移への恐怖や不安〉を抱いた。そして、〈治療の副作用・後遺症による身体の不調〉が生じ、〈一変する日常生活〉を体験した。さらに、〈経験者同士でなければ分かり合えないという孤独感〉を胸に抱えていた。そして、〈がん体験者と語り合い、揺れ動く心を安定させたい〉〈実体験からがんに関する情報を得たい〉という、【がん体験者と出会うことへの希求】がサロン参加の動因となった。2名は、新聞記事やテレビ番組からサロンの存在を知った。

サロンに参加し、がん体験者と出会うことにより、〈がんになっても生きていけると安堵する〉。そして、〈経験者同士で分かち合う〉中で、〈ありのままの自分であることができる〉と実感し、〈支え合える関係に心強さを感じる〉。また、サロンのメンバーと一緒に食事をして談笑することにより、楽しさを感じ、〈悩みや不安からひと時離れることができる〉ため、〈気持ちが穏やかになり明るい方へ向く〉。このような体験を経て、【安心感から得られる生きることへの希望】を抱くことにより、【役割意識の高揚】、【サロンにおける役割の認識】と結び付いた。それらは、がん体験を生かしたボランティア活動といった〈組織的な活動〉や、在宅ホスピスボランティアの啓発活動や育成といった〈地域への発信〉であり、地域における自己の役割を見出していった。すなわち『がん体験を生かした地域づくり』へと発展していた。

5 考察

5.1 サロン参加を通じた癒しと安心感が人生を歩む原動力を得る

本研究協力者はサロンに参加したことで、【がんをもつ一人の人として癒される体験】【安心感から得られる生きることへの希望】を感じていた。がんを体験し、新たに社会的な役割を獲得するためには、非常に大切なプロセスであると考えられた。

サロン参加者は、がん体験者と出会うことにより、〈がんになっても生きていけると安堵する〉体験をした。がんと診断されて死を身近なものとして強く意識

する方にとって、他のがん体験者との出会いは、自らの生が続くことを実感できる契機となった。磯本らが、乳がん手術後、多床室で入院生活を送る者は、手術を終えた同病者を自分のモデルとし、実用的な情報を得て、タイミングの良い援助を受けながら、自分の今後の目標をみつけ、希望や自信を回復している¹⁰⁾と指摘していた。〈実体験に基づくがんの情報を求め〉、〈経験者同士で分かち合う〉という点で本研究と共通しており、不確かだった明日への展望が開き、生きることへの希望が回復すると考えられた。一方で、病院ではなく、地域で生活している他のがん体験者と出会うという点では、本研究と異なっていた。

サロンに参加し、〈経験者同士で分かち合う〉中で、〈ありのままの自分であることができる〉と実感していた。小野らが、深刻なショックに見舞われている患者が仲間からの共感を得ることによって、心を開ききっかけとなった¹¹⁾と述べていることから、経験者同士だからこそ生まれる共感は、感情表出を促し、自己開示につながると考える。そして、有田らが、一人の人間として感情を表出することは、気持ちを楽にさせ、患者自身がありのままの自分に気づき、受け止めるプロセスの一つになる¹²⁾と述べているように、他者から受ける共感・承認により、自己開示が促され、語り合う中で、あるがままの自分を受容することができる¹³⁾と述べているように、あるがままの自分を受容することにより、自己価値観の回復をもたらすと考える。

また、小野らが、援助の受け手が同時に与え手となり、与えられた者が、さらに誰かを援助することで救われるというように援助役割が広がり展開していく¹¹⁾と述べているように、がん体験者同士の交流は、サポートの受け手と与え手という双方の機会を体験する機会であると言える。そして、砂賀らが、同病者との関係は、他者へのサポートを提供する機会となり、他者に対して役に立つということが自己の存在意義や自己効力感を高める¹⁴⁾と述べているように、自らもサポートの与え手であると自覚し、他者に対して役立つことを認識することにより、自己の存在意義を実感し、役割を見出していくことにつながると考える。さらに、サロン参加者は、〈支え合える関係に心強さを感じる〉体験をした。有田らは、他者と支え合える関係があると自覚することは、心を安定させるものであり、生きる活力の源となる¹²⁾と述べていることから、他者との繋がりは安心感をもたらす、他の社会へ進むことを後押しすると考える。すなわち、他のがん体験者との交流は自己の存在意義を高め、他者との繋がりを実感するこ

とにより、自己の役割を見出していこうと動き出す力を得ると考える。

したがって、他のがん体験者との出会いは、安心感を基盤とした生きることへの希望をもたらす、相互交流の中で自己の存在意義を再認識し、自分の人生を歩んでいく原動力を得たと考える。そうすることで初めて、身近な社会に自己の役割を見出していくことができるようになる。

5.2 がんが及ぼすライフステージへの影響

本研究の研究協力者の一人には、子育て期の母親がいた。この時期の人は、サロンに参加することにより、〈ありのままの自分であることができる〉場を得て、〈気持ちが穏やかになり明るい方へ向く〉と実感していた。子育て期の人は、妻や母という役割からひと時離れてがんをもつ一人の人として過ごすことができる場を得て、揺れ動く心が安定を取り戻していくと考える。そして、心の安定を得ることにより、自分の置かれた状況を再認識し、気づきを得て、【母親役割意識の変化】に至ったと考える。また、子育て期の人ががんに罹患することは、その子どもへ与える影響も大きく、〈子どもの心が母親から離れていく表情や行動〉が生じた。しかし、母親が子どもとサロンに参加することによって、自分のことに精一杯で母親自身が子どもを直接ケアすることができなくても、母親は【子どものための癒しの場づくり】をしていた。これは小島らが、病状説明を受けていない幼児学童期は、医療者への甘えや親（患者）との空間を共有し安心感を求めていた¹⁵⁾と述べているように、サロンメンバーから可愛がってもらい、家庭とは別の甘えることができる場を得るとともに、母親が〈気持ちが穏やかになり明るい方へ向く〉ことを感じ取ることによって、日常性を取り戻し、安心感を得たことに起因すると考える。したがって、母親にとってがんをもつ一人の人として過ごすことができる場、子どもにとって甘えることができる場としてサロンが機能し、母親役割意識の変化と、子どものポジティブな変化に至ったと考える。すなわち、がんを体験した子育て中の母親にとって、サロンの参加によって社会的な役割を獲得することは『癒され体験による母親役割の再生』を意味した。橋瓜らは、子育て中の乳がん患者が子供の心理面を心配し、子供が思いを表出できる場が必要である¹⁶⁾と述べているように、がんと診断された子育て期の人とその子どもを含めたケアが必要であると言える。

家族に関することは、子育てを終了している研究協力者からは、今回の面接調査では、あまり語られなかった。しかし、各ライフステージにおける、家族を含めた悩みやケアの必要性があると考えられた。一方で、【役割意識の高揚】さらには【サロンにおける役割の認識】が語られた。これらは『がん体験を生かし

た地域づくり』であると意味づけられた。近年、たとえ病気や障害があっても住み慣れた地域で暮らし続けることを支える地域包括ケアシステムづくりが推進されている。その中で、在宅の看取りの体制を整えることは喫緊の課題としてあげられる。その意味において、がん体験者がボランティアとして、地域で暮らす〈がんをもつ人へのケア〉をしたり、〈組織的な活動〉や〈地域への発信〉をすることは、地域住民の立場で行う地域包括ケアシステムづくりにつながると考えられた。そのため、このような地域で開催されるがんサロンの活動を支援し、発展させていくことは重要であると考えられた。

5.3 看護師に求められることと本研究の限界

本研究の結果から、がんと診断された人は、身体的・精神的な苦しみを抱え、他のがん体験者との出会いを求めていた。そして、この出会いが、身近な社会における役割を見出していくための原動力をもたらすことが示された。したがって、看護師は、他のがん体験者との交流を求めている方に、適した交流の場を紹介し、継続的なつながりを持てるようにサポート体制をつくる必要がある。そのためは、地域で活動するサロンの特徴を把握し、サロン運営者との関係づくりをすることが求められる。がん治療が終了した後も、本人だけでなくその家族も含めて、地域で互いにケアされるつながりが必要であることが示唆された。

本研究は、3名からではあるが、貴重な体験を記述することができた。しかし、対象者が少なく、1か所のサロン参加者を対象にしている。そのため、過度な一般化には限界がある。今後、他の地域のサロン参加者を対象にするなど、地域や対象者とも比較しながら検討する必要があると考える。

6 結論

がん体験者は、他のがん体験者との相互交流の中で【安心感から得られる生きることへの希望】を抱いた。そして、自分の人生を歩んでいく原動力を得て、身近な社会に役割を見出していった。子育て期にある人は、親子ともにがんの影響を受けたが、サロンは、母親にとってがんをもつ一人の人として過ごすことができる場、子どもにとって甘えることができる場として機能し、母親役割意識の変化と、子どものポジティブな変化に至ったことが明らかとなった。すなわち、『癒され体験による母親役割の再生』と意味づけられた。一方、子育てを終了した壮年期・老年期にある人は、【役割意識の高揚】さらには【サロンにおける役割の認識】に至り、『がん体験をいかした地域づくり』と意味づけられた。本研究において、がん治療が終了した後も、本人だけでなくその家族も含めて、地域で互いにケア

されるつながりが必要であることが示唆された。

7 謝辞

本研究を実施するにあたり、温かく迎え入れご協力いただきました地域のがんサロンの皆様に心より感謝申し上げます。

8 引用文献

- 1) 厚生労働省：平成 26 年 (2014) 人口動態統計 (確定数) の概況. 厚生労働省, (オンライン), 入手先 < <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei14/index.html> > (参照 2016-12-19)
- 2) 国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター：がん統計年次推移. 国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター, (オンライン), 入手先 < http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/annual.html > (参照 2016-12-19)
- 3) 厚生労働省：平成 23 年 (2011) 患者調査の概況 (結果の概要 3) 退院患者の平均在院日数. 厚生労働省, (オンライン), 入手先 < <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/11/dl/03.pdf> > (参照 2016-12-19)
- 4) 厚生労働省：平成 21 年地域保健医療基礎統計, がんの退院患者平均在院日数の年次推移. 厚生労働省, (オンライン), 入手先 < <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/hoken/kiso/21.html> > (参照 2016-12-19)
- 5) 厚生労働省：がん対策推進基本計画 (平成 24 年 6 月). 厚生労働省, (オンライン), 入手先 < http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/gan_keikaku.html > (参照 2016 - 12 - 19)
- 6) 廣津美恵, 辻川真弓ほか：がん患者・家族の抱える困難の分析—三重県がん相談支援センターにおけるがん患者・家族との面接を通して—. 三重看護学誌, 12:19-29, 2010
- 7) 光行多佳子, 阿部まゆみほか：「キャンパス型緩和ケア・サロン」におけるがんサバイバーの体験. Palliative Care Research, 9:308-312, 2014
- 8) 浅野美知恵, 佐藤禮子：がんと手術後 2 年から 3 年経過した患者とその家族員の社会復帰過程における自分らしさの回復. 順天堂医療短期大学紀要, 14:13-24, 2003
- 9) 豊田章江, 岡田麻里ほか：地域で暮らす療養者・家族・遺族のためのがんサロンの意味. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 15:47-55, 2015
- 10) 磯本暁子, 千田好子ほか：乳がん患者同士が多床室で入院生活を送る意義—セルフ・ヘルプ・グループに焦点をあてて—. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 4:21-26, 1997
- 11) 小野美穂, 高山智子ほか：病者のピア・サポートの実態と精神的健康との関連—オストメイトを対象に—. 日本看護科学会誌, 27:23-32, 2007
- 12) 有田広美, 澤田愛子：進行ガン患者と看護者が考える「癒し」. 富山医科薬科大学看護学会誌, 4:95-107, 2001
- 13) 谷本千恵：セルフヘルプ・グループ (SHG) の概念と援助効果に関する文献検討—看護職は SHG とどう関わるか—. 石川看護雑誌, 1:57-64, 2004
- 14) 砂賀道子, 二渡玉江：がんサバイバーシップにおける回復期にある乳がんサバイバーのがんと共に生きるプロセス. The Kitakanto Medical Journal, 63:345-355, 2013
- 15) 小島ひで子, 林文ほか：がん患者を親にもつ子どもへの親の病状説明とグリーフケア—がん専門病院看護師調査から—. 死の臨床, 38:172-177, 2015
- 16) 橋爪可織, 西田望ほか：外来で治療を継続している乳がん患者の子供への思い. 保健学研究, 28:29-35, 2016

The processes by which cancer survivors acquire social roles through participation in community “cancer salons”

Chihoro KURISU*¹ Mari OKADA*²

*1 Hiroshima Prefectural Hospital

*2 Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 1 September 2017

Accepted 14 December 2017

Abstract

The aim of this study was to clarify the processes by which cancer survivors acquire new social roles through participating in community “cancer salon” support meetings.

The study looks at a salon run by home hospice volunteers and chose as research subjects three salon members who are cancer patients and have taken part in the salon for over five consecutive years. The study conducted semi-structured interviews of around one hour each.

Qualitative analysis resulted in three core categories of processes for acquiring social roles: “strong desire to meet others stemming from distress/agonny,” “reclaiming the role of a mother through healing and experience,” and “community development making use of cancer experiences.” These core categories are made up of nine categories and 35 subcategories. It was shown that there are preliminary steps which must be undergone leading up to the acquisition of roles, and that it is absolutely necessary for there to be other cancer patients present who will provide their acceptance and approval. Furthermore, for someone who is raising children, both parent and child will be affected by cancer; the study showed that the salon may serve a function of “community development making use of cancer experiences.”

Key words: cancer survivors, cancer salons, social roles, role acquisition